巻頭言

歴史的視野と未来につながる展望に立った街づくりを

会長　真柴茂彦
（佐伯市中の島三丁目）

佐伯史談会が発足したのは、昭和三三年、以来四四年間現在まで営々とその業績は受け継がれている。機関紙「佐伯史談」は発足より遅れること七年、昭和四〇年の一月に第一号が発行されている。編集・印刷は当時佐伯鶴城高等学校の図書館にいた羽柴弘先生がガリ板できり、手刷り、製本そのうえ近隣は自転車で配達されていた。

今、改めて振り返ってみると会員の調査や研究の成果が盛り込まれているが、研究もさりながら毎回これをプリントしてくれた羽柴先生の仕事に頭が下がる思いである。

私の注意を引いたのは会長の高木、副会長の羽柴両氏の提言である。八二号巻頭の「佐伯の自然と歴史　どうとらえ、どう守るか」羽柴弘、八三号の「佐伯の自然と文化財を守る会を結成しよう」高木嘉吉で、この提言が公害問題でゆれ、その前に起こった三の丸御殿解体移築後のことであることは注目に値する。失われる郷土の自然と文化財に対して歴史を研究するものの立場から発言しようとしたのである。

心ある人達が三の丸御殿の取り壊しに反対をしたが、大きな声にはならなかった。市民みんなのための文化会館の建設ということが、取り壊し反対の矛先を鈍らせた。

しかし、羽柴先生は「当初、文化会館は三の丸下佐伯小学校の前に作り、三の丸はその広場や泉水（池）を手入れし、旧御殿も修理される」と聞いていたという。これが実施されていたら、城山周辺の景観はかなり異なったものになっていただろうと残念である。しかし、三の丸下には個人の家があり立ち退きが難しいという理由で、文化会館の建設は三の丸に、下は図書館や青少年の家、駐車場を作ることになったと言う。ここで、氏は幽邃（ゆうすい）の泉水や森にコンクリート四階（三階）の建物が調和するかどうかと疑問を投げかけている。

予想どおり、県指定文化財の櫓門と会館が不調和で、写真や絵にしようとする人は会館を画面に入れないよう

に努力していると聞く。

当時、一部の市民と佐伯史談会の会員だけでなく旧佐伯小学校の同窓会や市外から、三の丸への文化会館の建設に反対している。

県内にもほとんど類を見ない殿館と、再三の羽柴先生の提言にもかかわらず壊されることになった。この時、船頭町の区民の有志がこの由緒ある立派な御殿を壊すのは忍びないと、解体して一部を移築することになり現在の住吉御殿として残った。当時としては大英断であった。

なぜこのようなことを蒸し返すのかと言うと、現在、文化会館も老朽化した。そのうえ移築した住吉御殿も修理が必要な段階にきている。さらに、歴史資料館もはやばやと旧武家屋敷山中邸を壊したのに、その後の進展もない。

そして、二〇年前城山の今後について審議会を作り、一〇回あまりの審議の結果、自然に配慮し城と城山への道路拡張は見合わされたのに、一部にまだ城山にお城を建設の声も消えてはいない。

今、私たちは歴史的視野と長期的展望に立ち、かつての先輩の残してくれた教訓を胸に、思ったことを提言しなければならないときが来ている感じがする。

佐伯城は高政によって慶長一一年（一六〇六）に竣工している。元和三年（一六一七）二の丸炎上、さらに文化元年（一八〇四）落雷、天守閣は修復されることなく、三代毛利高尚の時から不便な山頂から三の丸に居館を移し、次第に充実させた。天保五年（一八三四）の絵図などが残っているが部屋は二〇を越え、寄棟の三階の建物などあり「規模の大きさ、複雑な間取り、珍しい部屋の名称等、江戸城の御殿を小規模にしたようなもの」と、城郭研究をしている小野英治氏は書いている。さらに移築前の三の丸御殿は、江戸時代城郭の居館遺構として日本の文化財として貴重な存在とも言っている。

復元するのならコンクリートの城ではなく、幸いにも一部残った御殿を修復、再度三の丸に移築して、絵図に則り（のっと）部屋を建て増し、毛利家の寄贈品を含む新佐伯市の資料を展示する歴史資料館として活用をはかることを考えてはと思う。山中家跡の資料館では駐車場もなく規模の小さい展示館を並べても、なかなか多くの人を呼べるようなものはできないのではないだろうか。

町の背後に残る貴重なコジイの森、歴史と文化の街として長期的展望に立ち、郡市合併後の佐伯市にふさわしい城山周辺の活用を願いたいものである。